

安楽寺歴史講演会を開催しました

去る10月1日（土）鳥屋城公民館で、安楽寺の文化財や重要文化財多宝小塔の歴史を考える講演会を開催しました。今回の講演会では、調査によって明らかになった新たな知見が数多く紹介され、参加者は仏像や建物の専門家による講演に耳を傾けていました。

安楽寺の位置する清水地区（粟生を除く）は、平安時代の終わり頃には阿弓河荘と呼ばれる荘園となり、京都の寂楽寺・円満院が領有していましたが、高野山がこれに異を唱え、その支配を巡って約300年間にわたり対立しました。最終的には嘉元2年（1304年）に寂楽寺・円満院が支配を放棄したことによって高野山領となり、以後その支配が進みました。

安楽寺に伝来する仏像は、いずれも平安時代後期の作と考えられ、古い仏像が集中している場所です。その中でも、阿弥陀堂に安置されてきた観音菩薩と阿弥陀如来は、その特徴から都で造られ、寂楽寺・円満院によって安置された可能性があります。また、観音菩薩は仏像だけではなく、台座も平安時代のもものが残されており、非常に貴重な事例

であることが指摘されました。

これに対して重要文化財の多宝小塔は、室町時代の初めに造られたものであり、荘園の支配権を手にした高野山が、その権力の象徴として造ったのではないかという仮説が提示されました。また、護良親王（もりながしんのう）よししんのうとも呼ばれる）真筆との伝承がある扁額（へんがく）の年輪を調査した結果、多宝小塔と同時代・同種の木材が使用されていることが明らかとなり、かつての安楽寺に存在した門に掲げられていた可能性が指摘されました。

講演会終了後は、安楽寺多宝小塔の修理作業場を公開しました。参加者の方々は、実物の多宝小塔や修理の様子を間近で見学し、その構造や先人の技に感嘆していました。



きたる平安時代の阿弥陀堂に安置された観音菩薩とその台座。像高95cm。



学見深く興味興
参加者の皆さんが講演会を
加す講演会
加者の皆さま。